琉球弧の祭祀と行事【一】

奄美群島編　　写真・文／木原盛夫

R01-001

琉球弧の祭祀と行事【一】

奄美群島編　写真・文／木原盛夫

CONTENTS

祈る島・・・3P
ショチョガマ（奄美大島・龍郷町秋名）・・・7P
平瀬マンカイ（奄美大島・龍郷町秋名）・・・16P
佐仁八月踊り（奄美大島・笠利町佐仁）・・・29P
キトバレ踊り（奄美大島・大和村思勝）・・・41P
油井の豊年踊り（奄美大島・瀬戸内町油井）
・・・45P
西阿室の豊年祭（加計呂麻島・西阿室）・・・64P
諸鈍シバヤ（加計呂麻島・諸鈍）・・・76P
今井大権現祭（奄美大島・龍郷町安木屋場）
・・・94P
ムチムレ踊り（奄美大島・大和村湯湾釜）
・・・104P
与論十五夜踊り（与論島）・・・111P
ナリムチ・・・120P
旧盆行事・・・122P
舟漕ぎ・・・125P
闘牛・・・128P
おがみ山・立神・アシャゲ・・・130P

【祈る島】

久米島で神人による雨乞いが行なわれたというニュースと、ロケットを打ち上げて人工的に雨を降らすという話題が並ぶ時代に、琉球弧の祭祀がどのように行なわれているのか知りたくて島々を訪ねて歩いた。

祭祀も昔とだいぶ変わってしまいました。忘却の彼方へと消えつつある私の記憶のなかの４０～５０年前は、祭祀のある年は気持ちが違い、それが近づくと夜道を歩くのも怖く（外灯が少なかったこともありますが）暴言や喧嘩も慎むよう言われたものです。祭りが始まると普段耳にしない太鼓の響きや、たまたま下校時に見た白装束をまとった神人のおばさん達が神々しく怖かったです。

神様を迎えて送るまでの２週間程は、本当に神様が存在しているような、島全体がそんな雰囲気のなか祭りが行われ、終わるとほっとしたものです。殿の庭も人でいっぱいでした。

大漁、豊作、健康等、日々の諸々の祈りを総括し祈願する村合同の礼拝だと思うのですが、近年は島民の関心がうすれてしまっています。それは文明の発達と、行政が一切関与していないからでしょうか。

おそらく２００～３００年前に始まったこの祭祀が今日私たちまで継承されていますが、私と同世代の人や若い人たちにはどう映っているんでしょう。昔がたいまつの明かりなら、今はローソクの炎のよう、このままほたるの光になり消えていくのでしょうか。私が神人になって感じたことですが、先輩達はどのように思っているのでしょう。

祭祀の様子を撮らせていただいたお礼に写真を送った折、神人になって５年目の女性から返って来た手紙。そこには祭祀と島そのものの変貌に困惑し、悲しむ気持ちが綴られていた。

琉球王国の尚真王（１４７７～１５２７）が、奄美から与那国までを琉球の支配に置いた際に、聞得大君（きこえおおきみ）を頂点とする祭祀を司る神組織を制度化した。奄美にも琉球から辞令書を発給されたノロ（神人）がおり、季節毎の祭祀を司っていた。ノロは世襲制のため、現在奄美では途絶えていると思われているが、奄美大島の宇検村・阿室集落で２００９年に集落のノロが祭祀を行ったという記事もある。

奄美大島の龍郷町秋名集落で行われている国の重要無形民俗文化財に指定されている平瀬マンカイは、ノロが海岸の岩に乗り、海の彼方の神々に豊穣を願う祭祀だが、現在は神人が不在なため集落の女性がノロの役を務めている。

また、神人が途絶えただけではなく祭祀そのものが消滅したりもしている。平瀬マンカイが行われる日の早朝、同じ秋名集落の山側では、ショチョガマと呼ばれる豊作祈願の神事がある。嘗ては名瀬の大熊や浦上、有良、芦花部などでも見られたが、稲作からサトウキビに農作物の主流が変化し、今では広い水田の残っている秋名でしか見られなくなった。

ノロは祭祀を司りシマ全体の繁栄を祈る公的な存在なのに対し、沖縄・奄美には個人の悩みなどの相談にのる民間霊媒師としてのユタも存在する。こちらは世襲制ではなく、巫女病（高熱や幻覚症状）などを経てシャーマンになるため、年齢や男女は関係ない。ノロよりユタの方が、霊能力者としての力は上だという見方もあり、仕事や病気など様々な相談事のために訪れる人も多い。

五穀豊穣（地方によって異なるが米・麦・粟・豆・黍）祈願と言いながら、今では祭祀の供物用としてしか粟が作られていない島もある。生活スタイルの変化は、島の祭祀や人々の信仰心そのものにもすくなからぬ影響を及ぼしている。

それでも神人たちはシマの繁栄を願う事が勤めだとして海に向かい、山に向かい、霊石に向かって祈りを捧げている。

神を迎え、神を送る祈りの儀式は、今も続いている。

【ショチョガマ】　２０１０年９月１３日撮影

旧暦８月最初の丙日であるアラセツ（新節）の早朝、秋名集落で行なわれる豊作祈願の神事。

山の中腹に造られた片屋根の小屋に男たちが乗り、日の出とともに「ユラ・メラ」と掛け声をかけて左右に揺らす。南側に倒れると豊作だと言われている。昔は名瀬の大熊や浦上、有良、芦花部などでも行なわれていたが、現在は広い水田が残っている秋名集落でしか見られなくなった。

R01-006

10P上　屋根の上でグージ（宮司）が豊作祈願の祝詞を唱える。
10P下　屋根に乗った男たちが、「ユラ・メラ」と声を掛けながら左右に揺らす。

13、14P　倒れた屋根の上で、円陣を組んで豊作祈願の八月踊りが踊られる。
15Pは、ショチョガマの跡と眼下に広がる秋名集落。

【平瀬マンカイ】　２０１０年９月１３日撮影

ショチョガマと同じくアラセツの日に、秋名集落の海岸では、午後からネリヤ（海の彼方）の神々に豊作を祈願する平瀬マンカイが行なわれる。

神平瀬と女童平瀬という２つの岩に、ノロ役の女性５人と、グージ、シドワキ（ノロの補佐役）役の男女７人が向かい合うように立ち、交互に歌を唄って祈りを捧げる。神事の後、浜に降りて八月踊りが踊られる。

上の写真は、海岸に向かうノロ役の女性。

女童平瀬（メラベヒラセ）に乗る、グージ役とシドワキ役の男女。

神平瀬（カミヒラセ）に乗って祈願する、ノロ役の女性たち。

R01-014

祈願が終わった後は、海岸で重箱の料理を広げて宴が催される。

28P下　集落の人たちは新米で作った赤飯を平たいサンゴ石の上に乗せ、神平瀬に供えて家内安泰と豊作を祈願する。

【佐仁八月踊り】　２０１０年９月１４日、２０１１年９月１４日撮影

八月踊りは、奄美大島の各シマ（集落）で踊られているが、シマによって歌詞が違ったり踊り方に個性が出たりする。

奄美大島北部・佐仁集落の八月踊りを初めて聴いた時、チヂン（太鼓）と声だけにも関わらず、反復して増殖し疾走して行く歌と踊りに鳥肌が立った。輪をつくり、歌いながら踊りながら最初はゆっくりと、そして徐々にテンポを上げて一体感を増し、高揚感を生み出して行く。

八月踊りは、稲刈りが終わり、豊作を神々に感謝する豊年踊りで、旧暦８月のアラセツ（新節）とシバサシ（柴差）に行なわれる。

佐仁集落では、アラセツとシバサシの各２日ずつ行ない、各戸をまわる。

＊アラセツは、旧暦８月の最初の丙（ヒノエ）の日。シバサシは、アラセツから７日目の壬（ミズノエ）の日。

R01-017

佐仁の八月踊りは、一軒一軒家をまわる「ヤサガシ」が昔からの慣わしだという。

30～34Pは２０１０年に撮影、35～38Pは２０１１年に撮影した。

郷土料理の並んだテーブルを囲んで、楽しげに踊りの輪が広がる。踊りの合間に、持ち寄った料理を味わう。こうして一軒の家で一時間ほど踊られる。

and more...